学術的な見地から「死海文書」の実像を紹介してくれる優れた入門書

説明は簡潔だが内容は豊かで、驚くほど多くの情報を提供

加藤哲平

J・J・コリンズ 著
山吉智久 訳
▶『死海文書』物語
どのように発見され、読まれてきたか
5・30刊 四六判264頁 本体2400円
教文館

「死海文書」、という言葉には曰く言いがたい魔力が宿っている。古くはアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』から最近ではヴィジュアル系バンド「R指定」のアルバムに至るまで、死海文書を登場させた作品は、この言葉の持つオカルティックなイメージを利用して、いかにも謎めいた雰囲気を作ることに成功してきた。多くの日本人にとっての死海文書とはそうしたサブカルチャー作品の小道具だろう。中には一歩進んで、「死海文書とは何だろうか」と検索してみる好奇心の強い人もいるかもしれない。するとその人は、今度は、「ヴァチカンの陰謀」だの「世界終末の予言」だのという文字列が踊るのを見て、「やはり」と意を強くするに違いない。かくして怪しい古文書としての死海文書の魔力は守られてきたわけである。

本書は、この厄介な魔力から死海文書を解き放ち、学術的な見地からその実像を紹介してくれる優れた入門書である。著者のジョン・コリンズは一九四六年というまさに死海文書が発見された頃にアイルランドで生まれ、その研究の中心地のひとつである米国ハーバード大学で博士号を取得した研究者である。現在はイェール大学神学部の旧約学教授として、黙示思想、知恵文学、ヘレニズム期ユダヤ教、死海文書などを講じている。二〇一九年には英国学士院が卓越した聖書学者に贈るバーキット賞を受賞した（ちなみにこの二年前にはわが国を代表する聖書学者、村岡崇光氏も同賞を受賞している）。

本書は七章立てで、第一章「死海文書の発見」、第二章「エッセネ派」、第三章「クムラン遺跡」、第四章「死海文書とキリスト教」、第五章「死海文書とユダヤ教」、第六章「死海文書と聖書」、第七章「死海文書をめぐる戦い」という構成になっている。一見して分かるように、死海文書をめぐる諸問題をバランスよく取り上げている。いずれの章でも説明は簡潔だが内容は豊かで、日本語訳で二百頁ほどの小著でありながら、驚くほど多くの情報を提供してくれる。一般読者を想定した本ということもあって、著者は自説を主張するよりも、さまざまな学者の異なる見解をできるだけたくさん紹介しようとしているようである。

そうした基本的には抑制の効いた筆致の中で、第一章の最後（三八―三九頁）で著者はめずらしく独自の見解を披露している。この部分は、本書の原著より少し前に出版された研究書『クムラン共同体を超えて（Beyond the Qumran Community）』（二〇一〇年）の要約になっている。著者の専門性と独自性が遺憾なく発揮されているという点で、この要約部分は本書の中でも白眉であるが、訳者あとがきでこの研究書にまったく言及がないので、ここで簡単にその内容を紹介して著者の立場を明らかにしたい。

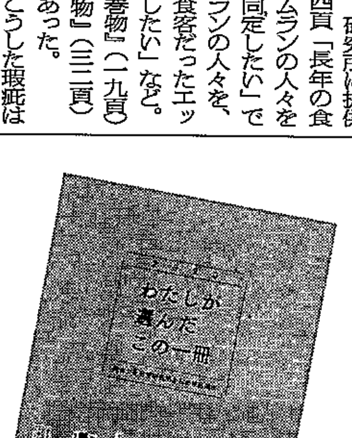
初期の研究者たちはクムラン共同体をエッセネ派と同定してきた。しかし、さまざまな古代の証言を見ると、エッセネ派には複数の共同体があったと考えられる。これを反映するかのように、クムランからは『ダマスコ文書』と『共同体の規則』という二種類の規則が見つかった。両文書には共通点もあるが、大きな差異も認められる。たとえば前者は結婚を認めているが後者は認めていない。このように異なる規則が同じ場所から見つかった理由を、多くの研究者はセクトの分裂の結果であると説明する。しかしコリンズは、『ダマスコ文書』がより古い共同体の規則を保存している一方で、『共同体の規則』はそこから発展したものだと考える。そして『共同体の規則』に出てくる「共同体（ヤハド）」とは、クムランにおける単一の共同体ではなく、むしろ各地に散らばるいくつかのエッセネ派共同体の集合を指す名称であるという。すなわち、「クムラン共同体を超えて」、ヤハドというより大きな共同体が存在するのである。以上のようなコリンズの所説は、従来のエッセネ派仮説を踏襲しながらも、これまで説明のつかなかったさまざまな矛盾を無理なく解消する優れたものといえる。

訳者の山吉智久氏はドイツで旧約聖書学の研鑽を積んだ気鋭の研究者にして練達の翻訳者である。現在ぷねうま舎から刊行中の死海文書の日本語訳プロジェクトにも、翻訳委員会の一員として参加している。本書の訳文もなめらかで概して正確だが、わずかに議論の余地が残るところも見受けられた。たとえば一六頁「大主教と……修道士による研究と同定のため」ではなく正しくは「大主教と……修道士によって……研究所に提供された」、六四頁「長年の食客を含めたクムランの人々をエッセネ派と同定したい」ではなく「クムランの人々を、彼らの長年の食客だったエッセネ派と同定したい」など。また『戦いの巻物』（一九頁）と『戦争の巻物』（三二頁）の表記ゆれもあった。

とはいえ、こうした瑕疵はわずかなものにすぎない。歴史的な重要性を認めつつも「死海文書は……偉大な文学ではない」（二一九頁）と大胆に言い切る本書は、死海文書を包み込む怪しい魔力を消し去り、我々をその真の姿に向き合わせてくれる。

（日本学術振興会特別研究員・京都大学）

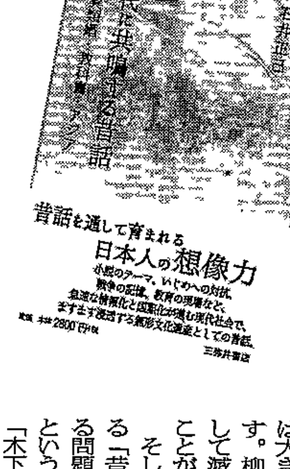
『わたしが選んだこの一冊』



河合文化教育研究所から、2020年版『わたしが選んだこの一冊』が発行された。研究所の理念のもと、受験勉強を超えた〈知〉の現場を提供するためにつくられたこの冊子も今年で11年目、その発行部数は65万部を超えているという。こうした試みは継続することに意義があり、良書を手にする第一歩として本冊子が果たしてきた役割の大きさがよくわかるだろう。

34名の主任研究員、河合塾講師、研究所のシンポジウム等に関わった外部の評論家・専門家が推薦文を寄せているが、今年は特に理数系・医学

…著
…に共鳴する昔話
…料書・アジア
…六判230頁 本体2800円



著者は柳田国男の世界をわたしたちの世代が考えてきた受容の仕方とは幾らか角度を広げ、多層なかたちで捉えていくことをこれまで指向してきたといっていい。例えば、

死、そして大震災からの復興を考えるときに、『遠野物語』は大きな示唆を与えてくれます。柳田国男の思考は今も決して滅びていないと断言することができます。」（同前）

そして、本書の書名にもある「昔話」という言葉をめぐる問題がある。柳田は「昔話」ということに拘泥していた。「木下順二は、太平洋戦争の深い反省から、次々と民話劇を発表して民衆運動を進めました。民話劇は社会が直面する現実の課題と向き合うことを使命感とし、民衆の話そのままではなく、新たな命を吹き込まなければ意味がないと

…して生
…でつなぐ
…頁 本体2500円

…る（100P）。

「二〇一一年三月一一日、滋賀県を発ち、日本海側を走

…だけだ。少女の隣で半座りして、ワンカップを置きながらなにかを食べている男は優し